

# 「西洋を救え！」

— アデナウアー政権とアーベントラント運動 —

板橋拓己

## 1 はじめに

ヨーロッパ統合と「近代」はいかなる関係にあるのか。この問いは、ヨーロッパ統合というプロジェクトの世界史的意味をどう考えるか、あるいはヨーロッパ統合の歴史をいかに叙述するかに深く関わる。

これまでヨーロッパ統合の歴史は、単線的な近代主義史観の延長上で把握されがちであった。例えば、しばしばヨーロッパ統合は「ポストナショナル」とか「ポスト国民国家」の試みと呼ばれるが、「ネイション」や「国民国家」が近代の産物であることに鑑みるなら、この場合ヨーロッパ統合はポスト近代のプロジェクトと位置づけられていると言えよう。現在までのヨーロッパ統合の成果を考えると、かかる近代主義的な語りは至極妥当なものにも思える。とはいえ、ヨーロッパ統合の歴史は、単線的な進歩史観のみでは捉えきれない<sup>1)</sup>。

些か抽象的な表現だが、ヨーロッパ統合は、反近代と近代とポスト近代、これら近代をめぐるそれぞれのベクトルがせめぎ合うなかで進められてきたと筆者は考えている<sup>2)</sup>。そこで本稿では、かかるヨーロッパ統合の複合的性格の一端を明らかにするため、これまで見落とされがちだっ

た反近代的なアクターの一つ、キリスト教保守主義に着目したい。

検討対象は、戦後初期のドイツ連邦共和国（西ドイツ）において、「アーベントラント（西洋：Abendland）」というスローガンを掲げ、ある種のヨーロッパ統合を唱導したキリスト教保守派の思想と運動、すなわち「アーベントラント主義」と「アーベントラント運動」である。

なお、アーベントラント運動については、すでにA・シルトやV・コンツェラ社会史家による優れた先行研究があり、筆者も多大な影響を受けているが、ドイツの「西欧化」「アメリカ化」(に抗するアーベントラント運動)といった、彼らの問題設定は共有しない。また、本稿では、コンラート・アデナウアー財団の Archiv für Christlich-Demokratische Politik (ACDP)、ハンス・ザイデル財団の Archiv für Christlich-Soziale Politik (ACSP)、コブレンツの連邦文書館 (BArch Koblenz) に所蔵されたアーベントラント運動の中心人物やアデナウアー政権の閣僚たちの個人文書なども用いつつ、アデナウアー政権側の動きも視野に入れて論じたい。

## 2 雑誌『ノイエス・アーベントラント』

第二次世界大戦直後のドイツでは、叢生した紙誌あるいは結社のなかで、ヨーロッパ統合論議が盛んであった。「アーベントラント」概念の流行もその文脈にある。独ソ戦時という例外はあるにせよ、ナチ体制が「アーベントラント」をプロパガンダ概念として重用しなかったことが、戦後における復活を可能にした。これは、ナチが活用したため公にはタブーとなった「ライヒ」や、ドイツ帝国主義の代名詞とされた「中欧 (Mitteleuropa)」とは対照的である。<sup>(5)</sup>つまり「アーベントラント」は、「ライヒ」や「中欧」のような伝統的なドイツのヨーロッパ秩序概念のなかで、珍しく「褐色化されず、貶められもしなかった」<sup>(6)</sup>ものだった。

さらに、敗戦直後のドイツにおける独特の精神状況が、「アーベントラント」概念の流通の背景にある。ナチズムという政治の過剰に倦み疲れたドイツ人たちにとって、「アーベントラント」が含む宗教的、文化的、脱民族的なトーンが、ある種の癒しの機能を果たしたのである。<sup>(7)</sup>こうして「アーベントラント」は、ドイツ(人)をヨーロッパという文化的共同体へ回帰させる概念として重宝されるようになった。

かかる状況を背景に一九四六年に創刊されたのが、雑誌『ノイエス・アーベントラント (Neues Abendland, Zeitschrift für Politik, Kultur und Geschichte)』(註文はNAと略記)である。<sup>(8)</sup>これは、ケルン出身のジャーナリストJ・W・ナウマンを編集責任者として、ヴァイマル期の雑誌『アーベントラント』の執筆陣が再結集して刊行されたものである。創刊号巻頭の「ドイツはアーベントラントと不可分である。ドイツは再び諸国民の共同体に組み込まれねばならない」<sup>(9)</sup>というナウマンの宣言は、

上述のドイツの精神風土にびたりと嵌るものであった。

こうして出発した『ノイエス・アーベントラント』だが、少なくとも初期は、文化的・神学的・歴史学的な問題に沈潜する傾向があった。確かに、「アーベントラントの文化的統一性」<sup>(10)</sup>を強調したり、社会の「再キリスト教化」を唱えること自体、敗戦後のドイツでは政治的な意味を持つ。しかし草創期の同誌では、かかる主張が具体的な政治目標と結び付けられることは稀であった。前述のナウマンの創刊号巻頭言も、「プロイセン化されたドイツ史解釈に反対すること」などを「我々の課題」として掲げていた。

しかし、一九五〇年前後に『ノイエス・アーベントラント』は、文化誌から政治的な雑誌へ、カトリック左派的な立場から保守化・右傾化へと舵を切っていく。この点でまず重要なのが、一九四八年のエミール・フランツェルの主筆就任である。いわゆるステューテン・ドイツ人であるフランツェルは、もともと社会民主党員だったが、三〇年代半ばから右傾化し(三七年に党脱退)、第二次大戦後にはカトリック保守の立場から、被追放者の利害を代弁していた人物である。<sup>(11)</sup>かかる経歴と思想を持つフランツェルのもと、『ノイエス・アーベントラント』は、政治的かつ攻撃的な論調にシフトしていく。

また、一九五一年初頭に『ノイエス・アーベントラント』は、上シュヴァーベンの貴族エーリヒ・フォン・ヴァルトブルクツァイル侯に買収された。<sup>(12)</sup>これに伴い、ミュンヘンにノイエス・アーベントラント出版が設立され、同時にインスブルックのテイロリア出版を通して同誌はオーストリアにも流通するようになった。<sup>(13)</sup>

こうして『ノイエス・アーベントラント』には、保守主義及び反自由主義が前面に出てくるとともに、被追放者の利害代弁や「中欧」への追

憶が顔を出すようになる（後述）。いまや同誌は「カトリック系雑誌のなかでは最も右寄りに」位置するようになったのである<sup>15</sup>。無論この転換を支えたのは、冷戦の本格的開始と、それに伴う激しい反共主義の台頭であった。

### 3 アーベントラント運動の組織化

『ノイエス・アーベントラント』の政治化に伴い、アーベントラント運動は組織化の局面を迎える。この動きに与ったのが、ナウマンに代わり、一九五一年から同誌の編集責任者となったゲルハルト・クロールである。

クロールもフランツェル同様、社会民主主義者からカトリック保守へ転向した経歴を持つ<sup>16</sup>。クロールの場合、オトマル・シュパンの国家論が転向の触媒となった<sup>17</sup>。第二次大戦後、クロールは被追放者としてバンベルクに移り、当地でバイエルンのキリスト教社会同盟（CSU）の創設に携わり、基本法を制定した議会評議会にも参加している。一九四九年から五一年まで「ナチ時代研究所」（後のミュンヘン現代史研究所）の初代所長を務め、その後『ノイエス・アーベントラント』に加わった。そして重要なのは、クロールの活動が、出版にとどまらず、政治組織化を目指すものだったことである。

こうして一九五一年八月、ミュンヘンで「アーベントラント・アクション（Abendländische Aktion）」という団体が設立された。創立式典では福音派のW・ハイルマンも演説しており、超宗派性を意識していたことが看取できる。

同時にクロールは、自ら活動の指針となるパンフレットを二冊著した<sup>18</sup>。

その一冊『アーベントラント・アクションの秩序像』の序文には次のようにある。

「アーベントラント・アクションは、没落しつつあるアーベントラントの刷新に尽力する精神的な運動である。／近代（Nezeit）の始まり以来、人間は次第に恣意的になり、万物の尺度たる神の要請を軽視するようになった。その結果、科学と技術は急速に進歩したものの、人間の内面と、あらゆる人間の秩序は崩壊した。神と人間の軽視は野蛮にまで行き着き、筆舌に尽くしがたい混乱を導いた。[...] そうした世界の最終的表現が、ボルシェヴィズムである。／宗教的・倫理的刷新なくして、人間の救済は不可能である」<sup>19</sup>。

こうしてアーベントラント・アクションは、キリスト教保守派に典型的な反近代的主張を掲げて活動を開始した。しかし、出資者エーリヒ侯との関係悪化から、一九五三年にクロールは『ノイエス・アーベントラント』の編集責任者を降り、同時にアクションは活動を実質的に停止した（公式には存続<sup>20</sup>）。

このアクションと並行して、よりエリート主義的な組織として一九五二年に設立されたのが「アーベントラント・アカデミー（Abendländische Akademie）」である（アクションの活動停止後、同団体のメンバーもアカデミーに移行している<sup>21</sup>）。

初代会長は、CSUのほか数々のカトリック系・保守系団体に属していた国法学者F・A・フォン・デア・ハイテが務めた。フォン・デア・ハイテは、戦間期からカトリック・アカデミカー連盟に所属し、「ライ

ヒ」理念にも共鳴していた人物である。

そしてアカデミーの理事会には、西ドイツの政界・経済界・学界の重要人物が集められた。理事のリストで目を引くのは、当時の与党CDU／CSU及びドイツ党(DP)の指導的政治家の名前である。大物としては、CDU／CSU連邦議会議員団長で一九五五年から外相を務めたハインリヒ・フォン・ブレンターノ(CDU)がいる。

また、ポメルン出身の福音派で、参議院相(一九五五～六二年)、司法相(五六～五七年)、被追放者相(六〇～六一)を歴任した、ハンスIIヨアヒム・フォン・メルカッツ(DP、のちCDU)も特筆すべき人物である。彼はパンヨーロッパ連盟で長く活動し、そのドイツ支部長(六七～七九年)を務め、また欧州石炭鉄鋼共同体(ECSG)の共同総会(のちの欧州議会)の構成員(五二～五八年)でもあった。他にも現役あるいは将来の連邦閣僚として、郵政相(四九～五三年)のH・シユールベルト(CSU)、被追放者相(五三～六〇年)のT・オーバーレンドナー(BHE、のちCDU)、家族相(五三～六二年)のF・J・ヴェルメリング(CDU)らが理事に名を連ねている。

加えて、理事の構成で見逃せないのは、マリア・ラーハの修道院長らカトリック教会の重要人物、ヴァルトブルクツァイル家をはじめとする貴族たち、被追放者が結成した同郷会連盟の会長らの存在である。

さらにアカデミーのメンバーの多くは、一九五二年にスペインを拠点に設立された「ヨーロッパ文書・情報センター(Centre Européen de Documentation et d'Information: CEDI)」にも加盟し、スペイン、フランス、オーストリアなどの保守主義者と国際的に連携している<sup>23)</sup>。

また、アカデミーは毎年バイエルンのアイヒシュテットで年次大会を開催した。これは、あるテーマをもとに内外の識者が集まり報告・討

論するシンポジウム形式のもので、二〇〇～五〇〇人が参加し、大会後には報告集(*Jahrestagung der Abendländischen Akademie*; 註ではJJAと略記)も刊行されている。

このように、一九五〇年代にアーベントラント運動は組織化の時代に入った。では彼らはいかなる政治・社会を目指していたのだろうか。そして彼らにとってヨーロッパ統合はいかなる意味を持っていたのだろうか。

#### 4 アーベントラント主義者の世界像

本節では、アーベントラント主義者の世界観や秩序像、そしてヨーロッパ統合に焦点を当てて検討する。分析の中心となるのは、クローラやフランツェルらアーベントラント運動の中核を担った人物の言説である。

##### (1) 「アーベントラント」の「復興」

まず、戦間期以来アーベントラント主義者に一貫する思考様式について、とりわけヨーロッパ統合に関連する二点を確認しておく。第一に、彼らの共通目標は、「アーベントラント」という同一の文化的紐帯で結ばれている(はずの)諸民族・諸国民・諸国家の協調や連帯、あるいは統合である。地理的範囲(例えば「中欧」を含むか否か)や統合の手法(例えば経済統合を優先するか否か)に関して意見の相違はあるにせよ、「アーベントラント」を境界とした「スープラナショナルな秩序(Ubernationale Ordnung)」形成へのコンセンサスは、少なくとも中核メンバーの間には存在していた。その意味でアーベントラント主義者は、ヨーロッパ統合というプロジェクトについて、言わば総論賛成の側にあ

った。

その際に彼らは、ヨーロッパ統合が、けっして新奇な試みではなく、「アーベントラント」の「復興」「再生」であることを強調した。例えばフランツェルは、「左派」や「社会主義者」が「ヨーロッパ連邦形成をめぐる現在の議論において、ヨーロッパに共同体意識や諸民族・諸国家の連帯がこれまで一度も存在しなかったかのように論じている」ことを批判し、「かつて存在していたアーベントラントの共同体感情」を想起させようとする<sup>(26)</sup>。

「完結した国民国家の追求が、我々をヨーロッパ全体の戦争へと巻き込んだ。[...]ヨーロッパ意識、王朝の連帯、貴族の国際的な関係性が自明であった旧きヨーロッパの終焉にタレーランが位置するように、コンラート・アデナウアー、シューマン、デ・ガスペリが、新しきヨーロッパの出発点に位置している。共通の苦しみが、我々に次のことを再認識させる。諸国民としての我々は、ナシヨナリズムによってではなく、その克服によってのみ生存しうるのだということを[...]」<sup>(27)</sup>。

すなわち、ナシヨナリズムを産んだ「近代」こそ「悲劇」の根源であり、「アーベントラント」の歴史にとつては逸脱だったとされるのである。

## (2) 重層的な政治秩序像

第二に注目すべきは、その重層的な政治秩序像である。クルルの著作に明瞭だが、彼らの想い描く秩序像は、家族に始まり、国家を経て、

「スープラナショナルな秩序」に至る、それぞれ神聖かつ固有な「神が創りし秩序」が重層的に積み上げられたものである。とくに「スープラナショナルな秩序」について、クルルはこう宣言する。

「国家秩序と同様、スープラナショナルな秩序も、神が創りし秩序の構成要素である。それゆえ[...]アーベントラント・アクシオンは、アーベントラントの伝統を尊重した、ヨーロッパ国際共同体 (europäische Völkergemeinschaft) の形成を要求する」<sup>(28)</sup>。

さて、以上の秩序間の関係を律するのが「補完性原理 (Subsidiaritätsprinzip)」に他ならない。再びクルルによれば、「ヨーロッパ国際共同体」は、域内の「自由と平和を保護し、戦争を防ぎ、国際法を保障する使命を持つ」一方で、「各国民 (Volk) が独力で解決できる課題には介入してはならない」し、各国民の「自立性、言語、習俗を破壊してはならない」とされる<sup>(29)</sup>。さらにフォン・デア・ハイテは、「もはや『古典的な』主権概念に存在事由はない。それに代わるべきものが、正しく理解された補完性の概念である」<sup>(30)</sup>と述べ、近代主権国家モデルと自らの秩序モデルを明確に対置している。かかる議論を支えているのは、ピウス一世の回勅「クアドラジェジモ・アンノ」(一九三一年)をはじめとするカトリック教説である<sup>(31)</sup>。

また、同様に重層的な政治秩序を築く原理として連邦主義も持て囃される。アーベントラント主義者にとつて連邦主義とは、そもそも「キリスト教的IIアーベントラント的な」ものであり、「長い伝統」を持つものだった<sup>(32)</sup>。「近代」の中央集権国家こそが災厄の源であり、連邦主義への回帰こそ「平和」を達成する手段であるというのが彼らの論法である。



さて、上記の諸点は、典型的なカトリック保守派の思考様式の一系譜と言えよう。そして、かかる思考様式を、第二次大戦後の現実のヨーロッパ統合に接続したものは、冷戦であった。

### (3) 反共、反米、独仏協調

アーベントラント主義者たちは、多くの保守派の知識人同様、強烈な反共主義者である。彼らは第二次大戦後に「西側結合」の支持者となったが、その理由は、一義的には反共に由来する。無論、戦間期から彼らの多くは反共主義者だったが、冷戦のエスカレートはこの傾向に拍車をかけた。「東側とのいかなる妥協もドイツを死に導きかねない」とフランツェルは述べている。彼はすでに一九四八年に軍事的な西側同盟編入を支持していたし、四九年二月にはドイツ分断を是認したうえで「全西欧の連邦化」を唱えていた。<sup>(33)</sup>

しかし、「西側結合」を支持したとはいえ、アーベントラント主義者たちのアメリカ合衆国への態度はアンビヴァレントである。彼らは、共産主義の脅威から西側を防衛する軍事的・経済的な盟主として、アメリカに頼らざるをえないことを認めていた。クローは「自由世界はボルシエヴィズムの攻撃に対抗するため、アメリカ合衆国の指導のもと、利用可能なあらゆる力を結集せねばならない」と述べたし、フランツェルはアメリカの核抑止にも賛同している。<sup>(34)</sup>

しかしこのことは、彼らが「西側」の価値を受容したことを意味しない。彼らにとって西側同盟への所属は、共産主義に対抗するための「より少ない悪」であった。<sup>(35)</sup> この点で重要なのが、彼らの紋切型の反アメリカニズムである。彼らは、共産主義とともに、アメリカの「非キリスト教的な」「物質主義」を拒否している。例えば『ノイエス・アーベント

ラント』に訪米記を連載したナウマンは、彼の地における「信仰心の欠如」「拝金主義」「純粋な物質主義」を報告しているが、かかるアメリカ像はアーベントラント主義者に共有されていた。

連邦家族相でアーベントラント・アカデミーの理事ヴェルメリングはこう述べている。「無神論的な物質主義は、鉄のカーテンの向こう側で待ち伏せしているだけでなく、日々至るところで自由なるキリスト教的アーベントラントに入りこんでいるのだ」。<sup>(36)</sup>

そこで彼らが出した結論は、「キリスト者は『西』にも『東』にも与しえない」というものである。<sup>(37)</sup> フランツェルが統合ヨーロッパを「異教の混沌に対するキリスト教文化の防壁」と呼ぶとき、その「異教の混沌」とは、共産主義だけでなく、アメリカニズムも指していた。すなわちヨーロッパは、「文化なき」アメリカに対し、軍事的・経済的には庇護を受けるものの、文化的・精神的にはなお優越しているとされるのである。<sup>(38)</sup> シルトが指摘するように、冷戦に対峙したアーベントラント主義者は、こうした「綱渡り」の論法を用いざるをえなかった。<sup>(39)</sup>

このアメリカへの両義的態度と、戦間期以来の親仏路線から、アーベントラント主義者たちはヨーロッパ統合の中核を独仏に見出している。例えば、シューマン・プラン発表の数カ月前の一九五〇年一月に掲載されたフランツェルの論説は、シャルルマーニュ以来の歴史を回顧しつつ、独仏は「言語は二つに分かれてはいるものの、一つの人民 (Volk)、すなわち一つのキリスト教的人民であった」とまで述べている。彼によると、まさに独仏こそが「アーベントラントの担い手」であった。<sup>(40)</sup> そしてフランツェルは、「かつてブリアンとシュトレイゼマンが従事した独仏協調に、現在ではシューマンとアデナウアーが取り組んでいるが、これが政府の仕事にとどまってはならず、両国民の責務とならねばならな

い」と訴えている。<sup>(45)</sup>

#### (4) 「中欧」の追憶とイベリアへの憧憬

注目すべきは、彼らが冷戦による東西分断を暫定的なものとして見做していたことである。アーベントラント主義者たちにとっては、失われた「中欧」あるいは「ドナウ圏」もまた「アーベントラント」に属すべき地域であった。<sup>(46)</sup> かかる立場は、被追放者であったフランツェルなどに代表されるが、なかでもオットー・フォン・ハプスブルクの存在は大きかった。

オットーは、一九五二年の『ノイエス・アーベントラント』で、「スTRASBURGに当座凌ぎとして創られた西欧の連合 (Westliche Union)」は「地理にも歴史にも経済にも正当な根拠を持たない暫定措置である」と強調する。彼によると、東西分断によって、本来アーベントラントの一員である「一億人を超えるヨーロッパ人がソ連の頸木のもとで苦しんでいる」。それゆえ、「小ヨーロッパ的解決」(＝西欧のみの統合)に満足せず、「ロシアの本来の境界線までのヨーロッパ」について考えよとオットーは力説するのである。<sup>(47)</sup> さらに、五一年九月にアーベントラント・アクションの会合で行った演説では、「西側統一戦線」あるいは「力の政策」を唱え、以下のように述べる。

「ヨーロッパの構築は、我らの大陸の東側の政治的・経済的な状況を変更して初めて達成されうるのだ。つまり、いわゆる衛星諸国が再び我らのアーベントラントとドイツの一部となり、統一性を取り戻してこそ達成されるのである」<sup>(47)</sup>。

そして、アーベントラント主義者にとって理想の国家像を体現していたのは、同時代のサラザールのポルトガルであった。サラザールは「現代における数少ない真正正銘の政治家の一人」<sup>(48)</sup> と賞賛されたし、フランツェルは、ポルトガルを「ヨーロッパで最も良く統治された国家」とまで呼んだ。<sup>(49)</sup> 当地のカトリシズムに基づいた職能身分制国家こそが、彼らにとって理想の国家＝社会関係だったのである。また、フランコのスペインもモデルと目され、スペインを「真のアーベントラント」と呼ぶ者もいた。<sup>(50)</sup>

結局、サラザールのポルトガルやフランコのスペインを模したような権威主義国家が相互に連邦主義的に結びつくのが、アーベントラント主義者たちにとっての理想のヨーロッパ統合なのだと言えよう。そしてそのモデルは、中世の神聖ローマ帝国、「ライヒ」秩序に他ならない。それが彼らには「自由な連邦秩序」なのである。<sup>(51)</sup> クロルに至っては、直截に「アーベントラントの刷新はライヒの刷新ともなるだろう」とまで述べている。<sup>(52)</sup>

#### 5 アデナウアー政権とアーベントラント運動

かかる世界像を有したアーベントラント主義者たちは、西独初代首相であるアデナウアーの政治を積極的に支持することになる。

アデナウアー自身、「アーベントラント」という概念を頻繁に、そして印象的に用いる政治家だった。例えば一九四九年九月の初政府声明は、「わたしたち「閣僚」のすべての仕事は、キリスト教的・アーベントラント的な文化の精神によって、そして法への敬意、人間の尊厳への敬意によって支えられるでしょう」と締め括られている。<sup>(53)</sup>

またアデナウアーは、ヨーロッパ統合を「アーベントラントの救済」の唯一の策として提示した。五年にキリスト教民主主義の国際組織N E Iで、次のように演説している。

「もしわたしたちがアーベントラントの文化とキリスト教的ヨーロッパを救おうとするならば、ヨーロッパを統合せねばなりません。ヨーロッパ統合は、キリスト教的アーベントラントを救済することが出来る唯一の策なのです」。

さらに、西独がN A T O加盟を果たした一九五五年五月九日にパリで行った演説では、「N A T Oは自由な諸国民の共同体であり、アーベントラント文化の共通の遺産、個人の自由、法の支配を守る決意を示すものです」<sup>(55)</sup>と述べたし、同年九月のソ連との外交関係樹立を議会に報告するにあたって、「ドイツの西側への帰属は、単なる政治情勢によるものではなく、もっと深遠なものです。つまり、ドイツがキリスト教的・アーベントラント的な文化サークルに分かちがたく帰属していることに根拠があるのです」<sup>(56)</sup>と切り切っている。

無論アデナウアーにおいても「アーベントラント」概念は反共と対になっている。例えば一九五四年のイースターに際するメッセージでは「依然としてボルシェヴィズムはキリスト教的アーベントラントを脅かす巨大な危険です」<sup>(57)</sup>と告げている。

こうしたアデナウアーの再三にわたる「アーベントラント」への言及、そして反共とヨーロッパ統合への固い意志は、アーベントラント主義者たちを喜ばせるものであった。

また、「宰相民主主義」と呼ばれたアデナウアーの権威主義的な統治

スタイルも、彼らの嗜好に合っていた。例えば一九五一年一月、アデナウアー七五歳の誕生日にあたって、『ノイエス・アーベントラント』は巻頭で祝辞を掲載している（フランツェルが執筆）。この時期は、アデナウアーが強引に再軍備政策を進めている最中であり、けっして国内でのアデナウアー政治の人氣は高くなかった。五〇年末の時点で政権支持率は二四％にまで落ち込んでおり、各州選挙でC D Uの敗北が続いていた。こうしたなかフランツェルは、「大衆」に阿らずに「寡黙に」政策を進めるアデナウアーを称えている。「党人」あるいは「大衆の人氣者」としてではなく、「偉大な政治家」として振舞っていると言賞する<sup>(58)</sup>のである。

もちろん、アデナウアーの断固たる「西側結合」志向と、アーベントラント主義者の思想世界とがどこまで重なっていたかは疑問である。共通項は、反共、「物質主義」の拒否、「プロイセン的伝統」批判、独仏和解の重視、超宗派性への志向などだろう。しかし、ラインラント出身のアデナウアーには、「中欧」への郷愁など微塵もない。また、戦後のアデナウアーが抱いた「キリスト教倫理」は、共同体の権威よりは、「個人の自由」及び「個人の尊厳や価値」を優先させるものであった<sup>(59)</sup>。アデナウアーとアーベントラント主義者との思想的隔たりはけっして小さくはなかったと言える。

しかし、アデナウアー率いるC D Uは、アーベントラント運動の有益性を認識していた。C D Uの選挙ポスターには、しばしば「アーベントラントを救え！」といったスローガンが見られる。さらに、第三回連邦議会選挙を前にした一九五七年三月には、『ノイエス・アーベントラント』にアデナウアー署名の選挙アピールを掲載したのである。このアピールは、内政面の成果には一切触れず、現政権の外交成果のみを誇示し



ているという点で特異である。すなわち、政府の「積極的なヨーロッパ政策」を強調し、ローマ条約という成果を示し、将来の「統一ヨーロッパ」を謳うものであった。<sup>(61)</sup>

つまりアデナウアーは、「アーベントラント」というトポスを駆使することによって、実際には自身の「西側結合」路線よりも保守的あるいは反近代的な層を支持者として取り込むことに成功したと言える。<sup>(62)</sup>

## 6 レヒフェルトの戦い千年祭

### ——アーベントラントの凋落

戦後の一〇年間、アーベントラント概念・運動は、占領期及び建国期の西ドイツでかなり浸透した。しかし、アーベントラント運動の絶頂と同時に、その凋落の契機となる出来事が一九五五年に起きた。「レヒフェルトの戦い」千年祭である。

レヒフェルトの戦いとは、九五五年にザクセン朝ドイツ王オットー一世（のちの神聖ローマ帝国初代皇帝）がアウクスブルク近郊のレヒフェルトでマジヤール軍を破った戦いであり、一九五五年はそれからちょうど千年にあたった。これを機に、カトリック教会の主導で、アウクスブルクで「聖ウルリヒ千年祭」という大規模な祝祭が催されることになった。聖ウルリヒは、九五五年当時のアウクスブルク司教であり、祈祷によってハンガリーに対する勝利を齎したとされる人物である。この聖ウルリヒを称え、一九五五年が「ウルリヒ年」とされ、七月に「聖ウルリヒ祝祭週」（三日～一〇日）が設定された。<sup>(63)</sup>この祝祭にアーベントラント主義者たちも積極的に関与する。例えば、アカデミーの会長フォン・デア・ハイテは「ヨーロッパの法統一の基本的特徴」と題する講演を行

っている。<sup>(64)</sup>

そして、祝祭週最終日にあたる七月一〇日の日曜日（アーベントラント信仰の日」と名付けられた）、アウクスブルクのローゼナウシュタディオンには実に六万人が集った。当時フランス司法相だったロベール・シューマンも演壇に立ち、独仏両国民の「キリスト教に基づく真の友情」を説いた。<sup>(65)</sup>まさにこのとき、アーベントラント運動は絶頂を迎えた。しかし、これは終わりの始まりでもあった。

問題となったのは、アカデミーの理事で、外相に就任したばかりのブレンターノの演説である。このとき彼は、反共的な意図から九五五年と一九五五年との「類似性」を指摘し、「東方」の「新しい異教」に対して「アーベントラント」の価値を守ることを訴えた。<sup>(66)</sup>

そもそもブレンターノにとってヨーロッパ統合は、経済的なものではなく、理念的なものであり、古典古代以来の「アーベントラント文化」に基づくものであった。<sup>(67)</sup>以前から彼のヨーロッパ統合に関する演説には、「キリスト教的アーベントラント」「アーベントラントの使命」といった表現が頻出していった。<sup>(68)</sup>またブレンターノが、カロリング朝や一六八三年の第二次ウィーン包囲などの過去を引き合いに出して「東方」の脅威を説くのも常習的なことであった。<sup>(69)</sup>

しかし、「聖ウルリヒ千年祭」での講演は、ブレンターノが外相就任後初の公の場での演説であり、これまでと違い注目度は高かった。またタイミング的にも、二カ月前に西独がNATOに加盟したばかりであり、さらに一週間後には米英仏ソ四大国によるジュネーブ首脳会談を控えていた。つまり、極めてデリケートな状況下での演説だったのである。このブレンターノ演説は、直ちに野党SPDやメディアによって槍玉に挙げられた。<sup>(70)</sup>なかでも影響力を持ったのが、雑誌『シュピーゲル』であ

る。同誌は、新外相の演説が単なる「失言」ではなく、彼が理事を務めるアーベントラント・アカデミーの世界観の表出であるとした。そして同記事は、アカデミーの主要メンバー一覧を写真つきで掲載するとともに、クロルの著作などを引用しながら、その思想を君主主義的・教権主義的で、基本法に反すると徹底的に批判したのである。さらに、アカデミーに連邦政府閣僚や与党議員の要人が参加していること、加えて同組織に連邦内務省管轄の機関である連邦祖国奉仕センターから資金が提供されていることも問題視された。<sup>(1)</sup>

この『シュピーゲル』の記事を受け、一九五五年一月七日の連邦議会では、SPDのヘルムート・シュミットが、「憲法に反する秩序を指した組織」への閣僚の参加、及び政府機関からの資金援助を追及した。これに対し、内相シュレーダーは「広範囲な調査」を約束した。<sup>(2)</sup>

年が明けてもメディアや野党の批判は続き、該当する閣僚は弁明に追われた。<sup>(3)</sup>アーベントラント・アカデミー本体も、一九五六年二月に自分たちは「自由で民主的な社会的法治国家の原理」を尊重しているという声明を出し、同年三月にはボンで釈明の記者会見を開いた。<sup>(4)</sup>

アーベントラント・アカデミーの「憲法敵対性」については、一九五六年一〇月に連邦検察官（Oberbundesanwalt: OBA）<sup>(5)</sup>が調査中止を発表した。アカデミーには「極めて尊敬すべき人びとが所属しており、その基本法への忠誠は疑いようがない」とされ、またクロルの著作も「全体的に抽象的なユートピア思想にとどまっており、その具体的な実現は追求されていない」という点で表現の自由の範囲内であり、処罰不可能であると判断されたからである。<sup>(6)</sup>

しかし、司法的追及は免れたとはいえ、以上の騒動がアーベントラント運動に与えた打撃は大きかった。『ノイエス・アーベントラント』は

五六年から季刊へ移行し、ついに五八年末に廃刊となる。アカデミーの年次大会も五七年から六〇年まで開かれなかった。

前述のように、この間の一九五七年の連邦議会選で、アデナウアーは『ノイエス・アーベントラント』に選挙アピールを掲載したが、これは野党のSPDやFDP（五六年二月に連立を離脱）の恰好の与党批判の材料となった。<sup>(7)</sup>以前からSPDは『ノイエス・アーベントラント』を「CDUプロパガンダの道具」として批判していたが、選挙戦でそれは激化した。FDPも、とくに北部の選挙戦で、アーベントラント・アカデミーとCDUの繋がりを非難していた。<sup>(8)</sup>かかる事態に対し、とりわけシュレーダーらCDU福音派は神経を尖らせた。

以上の状況から、与党の指導的な政治家たちは、アーベントラント・アカデミーから距離を置いていく。また彼らは、一九六〇年代には「アーベントラント」という語彙も慎むようになる。六二年六月のCDU連邦大会（ドルトムント）では、かつてアカデミーの大会に参加していた連邦議会議長E・ゲルステンマイアー（福音派）が、「キリスト教的アーベントラント」という表現に否定的な態度をとっている。アカデミーの理事を務めたメルカッツですら、六四年には「アーベントラント的」というレッテルを貼られることを嫌がるようになっていた。<sup>(9)</sup>もはや運動としても政治的な語彙としても「アーベントラント」は魅力を失ったのである。

## 7 おわりに

本稿は、アーベントラント主義者のような反近代的な勢力が、ヨーロッパ統合という言葉ばポスト近代的なプロジェクトの支持基盤ともなっ

ていたという逆説を示してきた。ヨーロッパ統合に積極的に関与する諸アクターが「同床異夢」にあることは、これまで様々な側面から指摘されてきたが、本稿は「夢」のなかでも最も反近代的な「夢」の一つを示したと言えよう。そして、かかる「同床異夢」の諸勢力の統合に成功した例が、西ドイツのアデナウアー政治だったのである。

さて、一九五〇年代後半以降のアーベントラント運動の衰退は、西ドイツにおける価値観の転換や世俗化、世代交代の進行と並行しており、本稿で扱ったアーベントラント運動自体は過ぎ去った歴史的存在となった。しかし、現代ドイツにおける反イスラム、反移民・難民言説のなかで「アーベントラント」という言葉が過剰に政治性を帯びているのを見るとき<sup>(8)</sup>、「アーベントラント」の歴史的位相を探る作業は、極めてアクチュアルな意味も有しているのだと主張してもよいだろう。

## 注

- (1) 遠藤乾・板橋拓己編『複数のヨーロッパ——欧州統合史のフロンティア』北海道大学出版会、二〇一一年を参照。
- (2) 無論「近代」自体、極めて論争的な概念である。例えば、ドイツ史学における「近代」概念につき、アクセル・シルト「二〇世紀ドイツにおける近代の諸問題」(熊野直樹訳)『歴史評論』第六四五号、二〇〇四年を参照。かかる論争性を承知の上で、本稿では、単純ではあるが、経済領域における資本主義、歴史意識における進歩志向、社会領域における個人主義化と世俗化、政治領域における国民国家という単位の是認、自由主義・民主主義の浸透、これら複数の要素を内包したものととして「近

代」を捉えたい。

- (3) Axel Schild, *Zwischen Abendland und Amerika. Studien zur westdeutschen Ideenlandschaft der 50er Jahre*, München 1999; Vanessa Conze, *Das Europa der Deutschen. Ideen von Europa in Deutschland zwischen Reichstradition und Westorientierung (1920-1970)*, München 2005.
- (4) 拙著『黒いヨーロッパ』吉田書店、二〇一六年刊行予定、第三章を参照。
- (5) 拙著『中欧の模索』創文社、二〇一〇年、終章を参照。
- (6) Heinz Hüten, "Europa und Abendland," in: Philipp W. Hiltmann (Hg.), *Tom christlichen Abendland zum christlichen Europa*, München 2009, S. 9-15, hier S. 11.
- (7) 敗戦後のドイツで、いかに広範な知識人や政治家が「アーベントラント」言説を用いていたかについては、vgl. Schild, *aa.O.*, S. 29-38.
- (8) ヴァイマル期については、拙稿「ヴァイマル期ドイツにおける「西洋」概念の政治化——ヘルマン・プラッツと雑誌『アーベントラント』」『地域研究』第一六巻一号、二〇一五年。
- (9) Johann Wilhelm Naumann, "Neues Abendland," *NA* 1 (1), 1946/47, S. 1-3, hier S. 2.
- (10) Friedrich Zoepfl, "Abendländische Kultureinheit," *NA* 1 (1), 1946/47, S. 5-11.
- (11) E.g. Ella Schmittmann, "Demokratie als personale Volksordnung," *NA* 2 (1), 1947, S. 1-3.
- (12) フランツェルの伝記として、Thomas Keller, *Emil Franzel (1901-*

1976, Hamburg 2012.

- (13) エーリッヒ侯にしろは次の追悼記事を参照。“Auf geradem Wege. Dem Fürsten Erich August von Waldburg zu Zeil und Trauchburg zum Gedächtnis,” *NA* 8 (7), 1953, S. 387-396.
- (14) “An die Leser,” *NA* 6 (4), 1951, S. 145.
- (15) Doris von der Brellie-Lewien, *Katholische Zeitschriften in den Westzonen 1945-1949*, Göttingen 1986, S. 207.
- (16) クロルにしろは未公開の回顧録的覚書を参照。ACSP, NL Gerhard Kroll, Nr. 1: Handschriftlicher Lebenslauf vom 26. 1. 1959; Manuskript seines memoirenartigen Lebenslaufes.
- (17) クロルは一九三五年にハーゲン大学でシムホンの講義を聴き「世界觀を語つたのだ」と。Vgl. Ebd., Bl. 17-20.
- (18) Vgl. “Abendländische Aktion. Zur Gründung am 25. 8. 1951 in München,” *NA* 6 (9), 1951, S. 508-512.
- (19) Gerhard Kroll, *Grundlagen Abendländischer Erneuerung*, München 1951 [ズト *GAE* に筆記]; *Das Ordnungsbild der Abendländischen Aktion*, 2. Aufl., München 1953 (zuerst 1952) [ズト *OAA* に筆記].
- (20) Kroll, *OAA*, S. 7.
- (21) ACSP, NL Gerhard Kroll, Nr. 1: Manuskript seines memoirenartigen Lebenslaufes, Bl. 70-73.
- (22) Ebd., Bl. 72f.
- (23) ㄷ ㄷ ㄷ ㄷ ㄷ ㄷ Johannes Grobmann, *Die Internationale der Konservativen*, München 2014.
- (24) Vgl. *JAA* 1954.
- (25) Emil Franzel, “Vom alten zum neuen Europa,” *NA* 5 (10), 1950, S.399-404, hier S. 399.
- (26) Ebd., S. 402.
- (27) Kroll, *OAA*, S. 22. なお「経済・社会秩序」にしろは「ヨーロッパの経済圏の統一」が主張され「貿易障壁の漸次撤廃及び通貨と課税原則の統一」が構想やねにしろ。Vgl. ebd., S. 16f.
- (28) Ebd., S. 22f.
- (29) Friedrich August Freiherr von der Heydte, “Die übernationale Ordnung,” *JAA* 1954, S. 88-99, hier S. 94. Vgl. ders., “Volkssouveränität,” Vortrag, gehalten in der Evangelischen Akademie Herrenab im Herbst 1953, ACDDP, Nachlaß F. A. von der Heydte, 01-156-0022.
- (30) Vgl. Adolf Süsterhenn, “Das Stufungsprinzip,” *JAA* 1954, S. 50-68.
- (31) Franz Herre, “Föderalismus als abendländisches Ordnungsprinzip,” *NA* 5 (9), 1950, S. 370-372, hier S. 371.
- (32) Emil Franzel, “Nach der Konferenz,” *NA* 4 (8), 1949, S. 245.
- (33) Ders., “Staatsform und geschichtlicher Raum,” *NA* 4 (2), 1949, S. 47-51, hier S. 51.
- (34) Kroll, *GAE*, S. 7.
- (35) E.F. [=Emil Franzel], “Ein notwendiges Nachwort,” *NA* 5 (5), 1950, S. 181-183, hier S. 182.
- (36) Helmut Ibach, “Die andere Möglichkeit. Das Kriegsrisiko der Friedenspolitik,” *NA* 8 (1), 1953, S. 33-38, hier S. 35. Vgl. auch: Conze, *a.a.O.*, S. 139.
- (37) Johann Wilhelm Naumann, “Licht und Schatten aus USA,” *NA* 5 (1), 1950, S. 4-10, hier S. 6.
- (38) Dr. Wuermeling, Festrede zur Feier des 500-jährigen Jubiläums

- des Mitraglautens, Köln, 18.11.1956, ACDP, Nachlaß Franz-Josef Wuemeling, 01-221-033, Bl. 5.
- (39) Wolfgang Heilmann, "Christliches Gewissen zwischen Ost und West," *NA* 6 (11), 1951, S. 597-606, hier S. 601.
- (40) Vgl. Vanessa Conze, "Abendland gegen Amerika!" in: Jan C. Behrends u.a. (Hg.), *Antiamerikanismus im 20. Jahrhundert*, Bonn 2005, S. 204-224.
- (41) Schildt, *a.a.O.*, S. 49.
- (42) Emil Franzel, "Frankreich und Deutschland als Träger des Abendlandes," *NA* 5 (1), 1950, S. 1-4, hier S. 2.
- (43) Ebd., S. 4.
- (44) Albert Karl Simon, "Grundlagen einer politischen Ordnung im Donauraum," *NA* 11 (4), 1956, S. 332-334, hier S. 333.
- (45) フロント派の回顧録は「古き民族帝國ホーネートランドの變遷」以来の王家の回顧録を記す(Emil Franzel, *Gegen den Wind der Zeit*, München 1983, S. 9)°
- (46) Otto von Habsburg, "Amerika und die europäische Integration," *NA* 7 (5), 1952, S. 321-332, hier S. 324.
- (47) Ders., "Die europäische Bedeutung des Donauraumes," in: ders., *Entscheidung um Europa*, Innsbruck u.a. 1953, S. 85-101, hier, S. 86f.
- (48) Robert Ingrim, "Atom und Angst," *NA* 6 (1), 1951, S. 3.
- (49) Emil Franzel, "Portugal, der bestregierte Staat Europas," *NA* 7 (5), 1952, S. 266-272.
- (50) Franz Niedermayer, "Spanien – echtes Abendland," *NA* 5 (7), 1950, S. 293-294.
- (15) Walter Ferber, "Das historische Europa als Kultureinheit," *NA* 4 (11), 1949, S. 321-324, hier S. 322.
- (16) Kroll, *GAE*, S. 94.
- (17) Konrad Adenauer, *Reden 1917-1967*, Stuttgart 1975, S. 169.
- (18) "Deutschland und der Friede in Europa," Ansprache vor den Nouvelles Equipes Internationales in Bad Ems, 14. Sept. 1951, in: Adenauer, *Reden*, S. 224-232, hier S. 230.
- (19) Ders., „Die Demokratie ist für uns eine Weltanschauung“. *Reden und Gespräche (1946-1967)*, Köln u.a. 1998, S. 98.
- (20) *Verhandlungen des Deutschen Bundestages, 2. Wahlperiode. Stenographische Berichte* 26, Bonn 1955, S. 5644 C, D (101. Sitzung am 22. 9. 1955).
- (21) "Trotz H-Bomber: „Fürchtet Euch nicht!“, Westfalenpost, 17. April 1954, in: Konrad Adenauer, *Briefe 1953-1955*, Berlin 1995, S. 94.
- (22) E.F. (=Emil Franzel), "Der Kanzler. Zum 75. Geburtstag Konrad Adenauers am 5. Januar 1951," *NA* 6 (1), 1951, S. 1-3, hier S. 2f.
- (23) Vgl. Helmut Ibach, "Bilanz der Union," *NA* 10 (10), 1955, S. 577f.
- (24) 拙著『マニスマー』中公新書「二〇一四年」六三-七一頁を参照°
- (25) Konrad Adenauer, "Entscheidung über Deutschland," *NA* 12 (2), 1957, S. 97.
- (26) まゆみは「ドイツには」福音派を中心に「アーベントラント運動」に批判的な者も少なくなかった。指導的な政治家では「例えば G・シュレーダー（五三年から六一年まで内相）その後外相や防衛相を歴任）らが、運動から明確に距離を置いていた。Vgl.



- Tim Geiger, *Atlantiker gegen Gaullisten*, München 2009, S. 51f.
- (63) この祝祭は「主権者側」の記念本『勝利の十字架』が重要な資料である。 *Crux victorialis. Ein Erinnerungsbuch an die St. Ulrichs-Festwoche und die Tage abendländischen Bekenntnisses vom 2. bis 11. Juli 1955 in Augsburg*, Augsburg (1955?)。
- (64) “Grundzüge der Rechseinheit Europas,” in: *Crux victorialis*, S. 215-219.
- (65) “Im Dienste des Friedens und der Brüderlichkeit,” in: *Crux victorialis*, S. 307f.
- (66) “Innere und äußere Einheit Europas bringt Frieden. Die Bedrohung des Abendlandes – Lehren aus der Vergangenheit für die Gegenwart,” in: *Crux victorialis*, S. 303-306, hier S. 303f.
- (67) この文の文脈を参照。 Rede Dr. von Brentano anlässlich der Feierstunde am 9. 5. 1955 (Straßburg, Montanparlament), Baruch Koblenz, N1239 [Nachlaß Heinrich von Brentano], Bd. 131, Bl. 120-128.
- (68) E.g. “Die Integration Europas,” Referat von Dr. von Brentano - Kongreß der NEI in Bad Ems am 15. Sept. 1951, ACDD, Nachlaß Bruno Dörpinghaus, 01-009-015/3.
- (69) E.g. Rede zur 800-Jahr-Feier für Bernhard Clairvaux am 23. Aug. 1953 in Speyer, Baruch Koblenz, N1239, Bd. 131, Bl. 82-119.
- (70) “Die Mystik in der Außenpolitik: St. Ulrich und Heinrich von Brentano,” *Sozialdemokratischer Pressedienst*, 18. Juli 1955, S. 4f.
- (71) “Abendland. Die missionäre Monarchie,” *Der Spiegel*, Heft 33 / 1955, S. 12-14. Vgl. auch: Gerhard Kroll, “Politisches Verantwortungsbewußtsein unerwünscht! Kesselreiben gegen Abendländische Aktion und Akademie,” Manuskript, ACSP, NL Gerhard Kroll, Nr. 11.
- (72) *Verhandlungen des Deutschen Bundestages*, 2. Wahlperiode. *Stenographische Berichte* 27, Bonn, 1955, S. 6196 B, C (116. Sitzung am 7. 12. 1955).
- (73) E.g. “Nebel über dem “Abendland” – Reichsphantastien mit habsburgischem Hintergrund,” *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 9. 2. 1956. CDUのメルカッツ文書には、関係者の新聞・雑誌のインタビューが纏めて保存されている。 ACDD, Nachlaß Hans-Joachim von Merkatz, 01-148-146/01.
- (74) “Ist die Abendländische Akademie verfassungsfeindlich?” Pressekonferenz in Bonn vom 9. 3. 1956, in: *Die Abendländische Akademie* 3 (1), 1956, S. 1-6 (ACDD, Nachlaß Merkatz, 01-148-146/01).
- (75) OBAは、連邦の公益を守るために設置された、連邦行政裁判所 (BVerwG) 付の検察官であり、「連邦公益代理人」とも訳される (南博方編『条解行政事件訴訟法 (初版)』弘文堂一九八七年 一〇〇四頁)。
- (76) *Der Spiegel*, Heft 45 / 1956, S. 74.
- (77) Ulrich Lohmar, “Deutschland ist nicht Spanien: „Neues Abendland“ mit Konrad Adenauer,” *Sozialdemokratischer Pressedienst*, 1. Aug. 1957, S. 5f.
- (78) “Offenbarter Machtwille: Dokumente aus dem „Neuen Abendland“,” *Sozialdemokratischer Pressedienst*, 20. Febr. 1956, S. 5f.
- (79) Vgl. *Die Protokolle des CDU-Bundesvorstands, 1957-1961*, Düsseldorf

1994, Nr. 1: 19. September 1957, S. 25.

(80) Vgl. Geiger, *Altamtiker gegen Gaullisten*, S. 56.

(81) 一九五五年九月のアデナウアー訪ソに随行したミュンヘンの東欧研究所所長H・コッホは、同年のアーベントラント・アカデミーの大会で共産主義を「新しい『イスラム』」と形容しているが (Hans Koch, "Osteuropa," in: *JAA* 1955, S. 93) 冷戦終焉後にこの関係は転倒し、再びイスラムが保守派の主たる「外部の脅威」を構成するようになった。なお、二〇一四年からドイツの排外主義運動として台頭したP E G I D Aの「A」が「アーベントラント」であることは興味深い。

(いたばし たくみ・成蹊大学教授)

